

02

政治権力



2-1 重要学者一覧

分野	学者	キーワード
権力概念	ラスウェル	実体説 他者の価値を剥奪する能力（他者への価値の付与）
	ダール	関係説 「B がしなかったような事柄を、A が B に行わせたとき、A は B に対して権力をもつ」
【新】権力概念	バクラック バラッツ	非決定権力
	ルークス	三次元的権力
	パーソンズ	社会的利益に奉仕する側面をもつ・非零和概念
	フーコー	『監獄の誕生-監視と処罰』・規律訓練型権力
権力の正当化	メリアム	ミランダとクレデンダ
	ウェーバー	支配の正統性（伝統・カリスマ・合法）
権力の構造	ミヘルス	寡頭制の鉄則
	ミルズ	パワー・エリート（軍幹部・大企業経営者・政治幹部）
	ダール	多元的エリート論

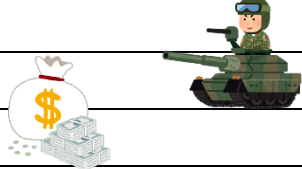
<<MEMO>>

2-2 権力概念

権力とは、他者を自分の思い通りに動かす能力のことであり、反抗する者には制裁手段をもってこれを抑えつけようとするものである。

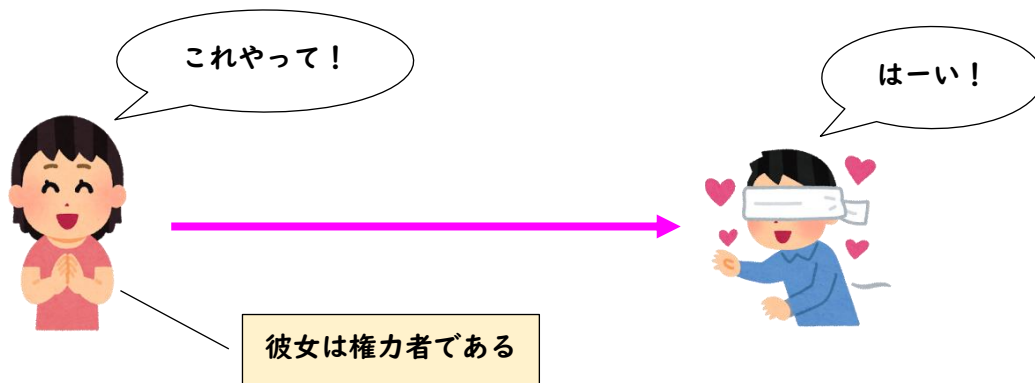
《実体説》

なんらかの資源の保有が権力を発生させると捉えること。



マキャヴェリ	軍事力	
マルクス	富	
ラスウェル	多元的価値（権力・尊敬・道徳・愛情・健康・富・技能・知識） ⇒他者の価値を剥奪する能力、他者へ価値を付与する能力	

《関係説》

個別的な人間関係に着目



R.A.ダール：「さもなければBがしなかったような事柄をBに行わせる場合、その度合いに応じてAはBに対して権力をもつ」


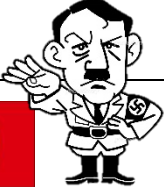
<p>P.バクラック M.バラツ</p>	<p>非決定権力：ある争点を議題から排除し、表面化させない権力のこと。 ⇒決定させない権力</p>
<p>S.ルークス</p>	<p>三次元的権力観 ⇒無意識のうちに従わせてしまうような権力 ⇒本来であれば表面化するはずの問題を隠蔽され、決定から排除される。</p> 
<p>T.パーソンズ</p>	<p>権力は他者を支配するだけではなく、社会的利益に奉仕する側面もある。 非零和概念：服従者から収奪したものと服従者が収奪されたものを差し引きすると、一見ゼロに見えるがむしろプラスになるという考え方のこと。</p>
<p>M.フーコー</p>	<p>『監獄の誕生 - 監視と処罰』 ⇒近代の権力は、実力や暴力などの強制は伴わず、権力作用を受ける者が自分で自分を規律するように仕向けるという形で自動的に行使されるものであり、権力の最上位であると主張した。</p> 

《MEMO》


2-4 権力の正当化

権力を用いて長期的に支配を続けるのは難しく、いずれ権力に対して反乱が起きるものである。そこで「権力」を正当化し、支配を継続するための理論を唱えた2人の学者を見ていく。

《C.E.メリアム》

ミランダ	感情に訴えるやり方 例) 国旗、国歌、軍事パレード (ナチス・ドイツ)	 
クレデンダ	知性に訴えるやり方 例) イデオロギー、理論など (共産主義)	

《M.ウェーバー》

伝統的支配	伝統や慣習に合致していることを根拠とする 例) 世襲制、村のおきて	
カリスマ的支配	カリスマ (超人的資質) を示すことによる 例) ナポレオン、ヒトラー	
合法的支配	法や規則などが合法であることを根拠とする 例) 近代官僚制	

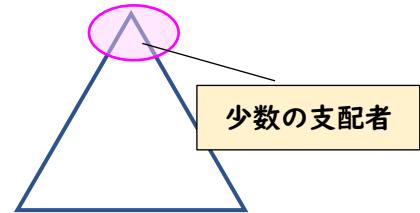
《MEMO》

2-5 権力の構造

「誰が権力を持つのか」についてたくさんの学者がいろんなことを言ったが、以下代表的な3名を紹介する。

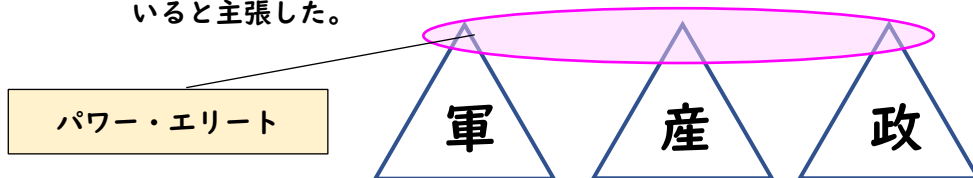
《R.ミヘルズ》

寡頭制の鉄則：いかなる組織も、規模が大きくなるにつれて、少数の幹部が組織全体の運営を担うようになる。



《C.W.ミルズ》

パワー・エリート：ミルズはアメリカ社会の権力構造を洞察した結果、**軍（軍部）・産（経済界）・政（政界）**という3つの存在の上位に位置するエリートたちが、アメリカ社会を動かしていると主張した。



《R.A.ダール》

多元的エリート論：政策決定に影響力をもつエリートは、争点領域ごとに異なる。
⇒ミルズのようなパワー・エリートによる支配はないと考えた。

《MEMO》

No.1 政治権力に関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。

1. アレントは、アメリカの権力的地位にある者の構成とその変化を分析し、第二次世界大戦後、軍幹部、大企業経営者、政治幹部の三者に権力が集中する傾向が進み、三者が結びつきを強め、パワー・エリートを形成しているとした。
2. メリアムは、権力を、それを行使する者と行使される者との間の関係においてとらえ、「さもなければBがしなかったような事柄をBに行わせる場合、その度合いに応じてAはBに対して権力をもつ」と定義した。
3. ダールは、権力は自由を可能ならしめる公的空間を支え、自由を抑圧する暴力とは対極に立つものであり、「銃口から生まれるのは暴力であり、決して権力ではない」と主張した。
4. ミルズは、人間は社会における種々の価値を所有もしくは追求しており、ある人間が他の人間のもつ価値に対して、これを剥奪する能力を有するとき、そこに権力関係が成立するとした。
5. パーソンズは、権力が他者を支配し、権力者の自己利益の実現にだけ使われるのではなく、権力には社会的利益に奉仕する側面もあることを強調し、政治権力を「目標達成のために社会的資源を動員する能力」と定義した。

No.2 権力論に関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。

1. ラズウェルは、政治権力の正当性がどのように獲得されるかについて、信念に訴えて権力の合理化を図る「クレデンダ」と、象徴を巧みに使って情緒に働きかける「ミランダ」があるとした。
2. メリアムには、『権力と人間』の著作があり、人間は社会における種々の価値を所有もしくは追求しているが、ある人間が他の人間のもつ価値に対して、これを剥奪する能力を有するとき、そこに権力関係が成立するとした。
3. ルークスは、アメリカの権力的地位にある人々の構成とその変化を分析し、第二次世界大戦後、軍幹部、大企業経営者、政治幹部の三者に権力が集中する傾向が進み、「パワー・エリート」を形成しているとした。
4. フーコーには、『監獄の誕生』の著作があり、近代の権力は、実力や暴力のように目に見える形で行使されるよりは、権力作用を受ける者が自分で自分を規律するように仕向けるという形で、自動的に行使されるとした。
5. バクラックは、本来であれば争点化するであろう問題が制度的に隠蔽され、決定から排除された者の真の利害が表出されないどころか、当人に意識されることすらない形で行使される権力に注目し、「三次元的権力観」を提示した。